

# 長崎大学のA O入試5年間を総括する<sup>1)</sup>

大作 勝，南部広孝（長崎大学）

長崎大学では平成 14 年度から A O 入試を導入し，平成 18 年度入試で 5 回目の実施を終えた。本稿では本学におけるこの間の A O 入試に関する諸データをまとめ，これらについて解析した。また A O 入試について，今後解決すべき課題についても整理した。

## 1．はじめに

周知のように，わが国における 18 歳人口は 1992 年の約 205 万人をピークとしその後減少し続けている。またわが国の現在の人口動態から判断して，大きな社会的変動がない限り，18 歳人口の減少傾向は今後しばらくの間変化しないと予測される<sup>2)</sup>。

その一方で，大学の募集定員は今なお増加傾向にある。公私立大学ではなお新設が続いている。平成 10 年度以降，ここ 10 年間ほぼ毎年 10 を超える大学が新たに開設されている（文部科学省 2006a）。国公立大学では統合などにより大学数の減少があったものの，募集定員の総計は大きく減少していない。このような状況下において，入学者選抜の意味そのものが大きく変わりつつある。すなわち，少なからぬ大学で実質競争倍率がほとんど 1 倍を超えない状況となっており，選抜とは名ばかりで学生集めのみを目的とした入試の実施という状況も広がりつつある。

もちろん，そのような状況であるからこそ，より優秀な学生の確保は多くの大学にとって重要な課題であり，そのための選抜方法改革も進んでいる。そのうち A O 入試に関しては，国立大学に限定してもこれを導入しているところは毎年少しずつ増加していて，平成 19 年度には筑波技術大学ほか 5 大学が新たに導入し，全体の 4 割を超える 35 大学が実施するまでになっている（文部科学省 2006b）。導入の理由はいくつかあるが，その一つはこの入試によって一般選抜では得られない特性を

持った学生を得ようとしていることにあるのは間違いない。何年かの A O 入試データをまとめかつ解析した先行研究には，北海道大学（山岸ほか 2004；山岸ほか 2005；山岸 2006），筑波大学（白川ほか 2004）と九州大学（武谷ほか 2005；武谷ほか 2006；副島 2006）の例がある。また国立大学における A O 入試入学者の特性を 2003～2005 年における研究報告をもとにレビューしたものもある（渡辺 2006）。A O 入試は大学，学部によって大きくやり方が異なり，各大学での結果を明らかにすることはそのあり方を考えるうえで有意義だと考える。長崎大学は平成 14 年度から A O 入試を始めており（大作ほか 2004），最初の卒業生が出た現時点は，これまでの取り組みを総括し，今後のあり方を検討するよい機会である。

本研究の目的はしたがって長崎大学の A O 入試 5 年間をまとめ，関連するデータを分析することである。これによって，長崎大学での A O 入試の経験を整理するとともに，新たな知見を得ることができ，ひいてはまた入学者選抜に関し新たな戦略的意味を見出すことができる可能性もあると考える。

## 2．長崎大学の A O 入試

平成 14 年度入試から教育学部，歯学部，水産学部の 3 学部で始められ，翌 15 年度から全 8 学部で導入された。ここで長崎大学の A O 選抜のしくみをごく簡単にまとめる。

## ・選考体制

選考に関わるアドミッションセンター教員は、専任教員（平成 18 年度 3 名）と各学部から選出された兼務教員（平成 18 年度 12 名）からなっている。これとは別に各学部から当該学部の選考作業にのみ参加する学部委員（各学部複数名）がいる。

## ・第 1 次選考

これにはアドミッションセンター教員と各学部から選出された委員があたり、主に書類選考である。志願者からの提出書類は概ね「調査書」、「自己推薦書」、「諸活動の記録」である。この書式は全学部でほぼ統一されつつあるが、細部では異なっている。第 1 次選考で募集人員の何倍程度の合格者を出すかは学部（又は学科）によって異なる。

ここで志願者から出される書類の信頼性をどのように判断するかが、この選考過程の課題である。すなわち、には学校間（又はクラス間）格差が含まれているであろう。またには第三者の手が加わっている可能性がある。さらにには学内での活動と学外での活動の区別、期間、重要度など客観的に判断しづらい要素も含まれている。またこれらのことと関係して、志願者の提出書類作成に関する負担増を指摘する高校教員の意見もある。

## ・第 2 次選考

ここでは課題論文、面接面談、プレゼンテーション、簡単な実験などが課せられる。内容は学部・学科によって異なる。選考過程でアドミッションセンター教員が大きく関わる学部と、ほとんど、あるいはまったく関わらない学部がある。またこの過程での選考基準、選考方法は学部・学科等募集単位によって多様である。

第 2 次選考でセンター試験を課すところは入試年度によって異なっている。平成 15～18 年度でこれを課しているのは医学部である。歯学部は平成 18 年度から、薬学部は平成 17 年度から課しており、環境科学部は、平成 15、16 年度入試にのみセンター試験を課していた。

## 3. データの解析と考察

### 3.1 募集人員と志願者数の推移

募集人員および志願者数は図 1 のとおりである。この間募集人員は、全学の計としてわずかずつ増加している。全志願者数はほぼ安定しているが、学部によっては漸減のところもある。AO 入試全体の志願倍率はやや低下傾向にあるものの、本学の一般選抜前期日程と比較して概ね高倍率を維持している。

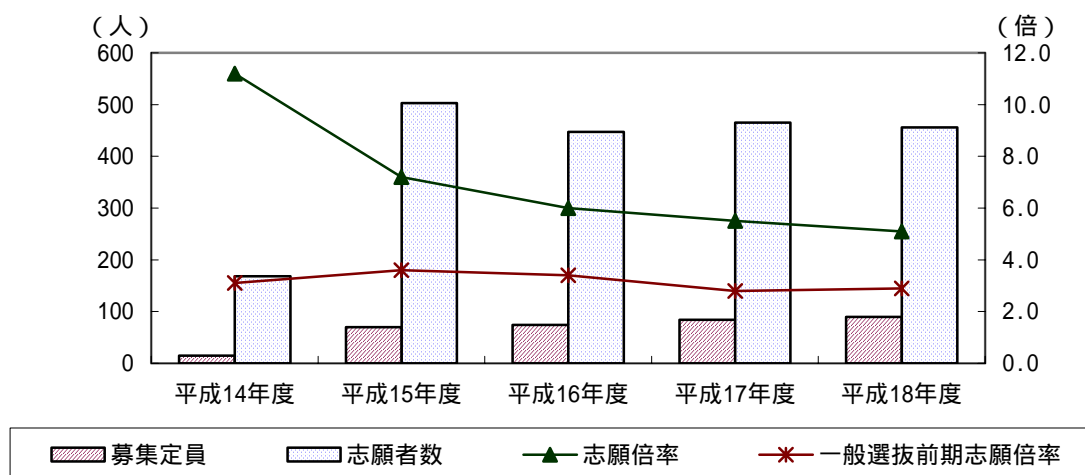


図 1 長崎大学における AO 入試実施状況

### ・志願者の地方分布

A O入試志願者の出身高校の所在地（都道府県など）の分布について検討する。区分は長崎，九州（長崎を除き，沖縄を含む），中四国，近畿，中部関東，東北北海道，外国その他（大学入学資格検定によるものを含む）とした（表 1）。これによるとかなり広い範囲からの志願があるが，長崎を含め九州からの志願者が概ね優勢であることがわかる（平成 18 年度では 75% に達している）。平成 15 年度入試から医学部等が新たに A O 入試に加わった

ため，中部関東からの志願者が著しく増加した。平成 16，17 年度，中四国，近畿，中部関東からの志願者は，ほぼ同数である。18 年度は近畿がやや減少した。しかしこれら 3 区分からの志願者は平成 16 年度以降減少傾向にある。一方長崎からの志願者は徐々に増加の傾向を示している。九州大学の「21 世紀プログラム」でも平成 15 年度以降，地元福岡からの志願者が増加している（副島 2006）。これらはいずれも地元の高校が積極的に対応するようになった結果であろう。

表 1 A O 入試志願者の出身高校の所在地（都道府県など）による分布

	長崎	九州	中四国	近畿	中部関東	東北北海道	その他
H14	28(17)	80(48)	25(15)	15( 9)	13( 8)	4( 2)	3( 2)
H15	79(16)	212(42)	52(10)	66(13)	81(16)	12( 2)	1( 0)
H16	100(22)	190(43)	51(11)	52(12)	51(11)	3( 1)	0( 0)
H17	120(26)	208(45)	44( 9)	41( 9)	47(10)	4( 1)	1( 0)
H18	147(32)	194(43)	43( 9)	27( 6)	42( 9)	3( 1)	0( 0)

カッコ内の数値は全体に対する比率（％）

### 3.2 男女比の推移（表 2）

A O 入試に関し，志願者群から合格者群への選抜に伴う男女比の推移については，著者らによって解析がなされている（大作・南部 2005）。これによると，いくつかの条件がそろえば，この過程で女子比が高まることあるとの推論がなされている。長崎大学の 5 年間の A O 入試について見ると，この期間を通してこの比がほぼ同じ傾向を示す学部とかなり大きく変化する学部があることがわかる。前者には教育学部，経済学部，水産学部がほぼ該当しているように見える。これに対して歯学部や薬学部は後者にあてはまると考えられる。このような結果になる理由としてこの 5 年間に 選考方法が大きく変わった， 選考基準・条件が変わった，などの要素があるかもしれない。なかでも「センター試験を課す」か，どうかは大きな要因であり得るだろう。センター試験を課すところでは，その比重によって程度に差はあるだろうが，センター試

験を重視する一般選抜の場合と類似の傾向を示すようになるであろうことは想像に難くないからである。ちなみに本学の平成 16～18 年度入試における一般選抜前期及び後期日程での志願者と合格者の女子比の平均値は，歯学部と薬学部で概ねそれぞれ 36%（34%），50%（48%）であり（カッコ内は合格者の数値）選抜過程でその比は大きく変化しないことがわかっている。

以上のことは，選抜結果としての男女比の推移は，専門分野に対する志向の違いだけではなく，選考方法（センター試験の有無を含め）からも，一定程度の影響を受けることが考えられることを，示唆しているといえる。

### 3.3 A O 入試の評価

A O 入試による学生はどのように評価されているのだろうか，また高校にはどのような影響を与えたのだろうか。これらのことについて簡単に述べる。

表2 平成 17, 18 年度 A O 入試における女子の割合 (女子比) <sup>a-c)</sup>

平成 17 年度

学部	募集人員	志願者数	倍率		第 1 次選考合格者数		最終合格者数	
教育	16	102 ( 70 )	6.4	69%	33( 26 )	79%	14 ( 11 )	79%
歯学	5	34 ( 21 )	6.8	62%	16( 13 )	81%	5 ( 4 )	80%
薬学	10	27 ( 16 )	2.7	59%	22( 15 )	68%	4 ( 2 )	50%
経済	5	33 ( 14 )	6.6	42%	11( 5 )	45%	5 ( 3 )	60%
工学	29	65 ( 7 )	2.2	11%	52( 7 )	13%	37 ( 5 )	14%
水産	5	28 ( 9 )	5.6	32%	17( 8 )	47%	5 ( 3 )	60%
医学	10	148 ( 66 )	14.8	45%	51( 23 )	45%	10 ( 1 )	10%
環境科学	4	28 ( 10 )	7.0	36%	14( 8 )	57%	5 ( 4 )	80%
計	84	465 ( 213 )	5.5	46%	216( 105 )	49%	85 ( 33 )	39%

平成 18 年度

学部	募集人員	志願者数	倍率		第 1 次選考合格者数		最終合格者数	
教育	16	103 ( 73 )	6.4	71%	40( 36 )	90%	20 ( 19 )	95%
歯学	15	25 ( 14 )	1.7	56%	25( 14 )	56%	9 ( 4 )	44%
薬学	4	17 ( 9 )	4.3	53%	12( 7 )	58%	4 ( 1 )	25%
経済	5	35 ( 12 )	7.0	34%	10( 4 )	40%	5 ( 2 )	40%
工学	31	90 ( 9 )	2.9	10%	58( 8 )	14%	36 ( 4 )	11%
水産	4	26 ( 7 )	5.2	27%	15( 6 )	40%	5 ( 3 )	60%
医学	10	133 ( 60 )	13.3	45%	50( 20 )	40%	10 ( 5 )	50%
環境科学	4	27 ( 14 )	6.8	52%	13( 6 )	46%	4 ( 2 )	50%
計	90	456 ( 198 )	5.1	43%	223( 101 )	45%	93 ( 40 )	43%

<sup>a)</sup> 倍率 = ( 志願者数 ÷ 募集人員 )

<sup>b)</sup> 括弧内の数値は女子数を示す。

<sup>c)</sup> % 付きの数値は女子比を示す。

### 3.3.1 A O 入試入学生の評価

A O 入試入学生の評価として、ここでは大学での成績と卒業後の進路について述べる。

成績：本学では現在 A O 入試による入学生の大学における成績とその他の全ての選抜方法で入学した学生の成績について、G P A (Grade Point Average) を指標とするデータ解析を進めている。これによると A O 入試入学生の成績は全 8 学部 にわたって、それぞれの学部又は学科などで比較的上位に位置していることが判明している。九州大学の A O 選抜生についても同様な結果が得られている (渡辺・武谷 2005)。しかしながらこの傾向は、ケースによっては必ずしも一般的ではないようである (大久保・郡司 2005; 大久保・郡司 2006; 大嶋・内村 2005)。

進路：平成 14 年度入試で入学した学生は、

教育学部 5 名、歯学部 5 名、水産学部 6 名であり、教育、水産両学部の学生は、平成 18 年 3 月に卒業した。これに関し、各学部からの報告を見ると、全体的にまずまずの進学・就職実績となっているが、サンプル数が少なく、更なる議論はしない。

### 3.3.2 高校では

A O 入試は大学によってその考え方、視点、方法などが大きく異なっている。しかし高校ではこのことを理解するのに苦労していることが多く、結果として過去にはこの入試制度を敬遠する傾向があったと推測される。しかしながらこのところ A O 入試に積極的に対応しようとするところもあらわれてきている。最近 1 か年をかけて九州地区を中心に約 80 校の高校を訪問し、聞き取り調査を行った結果によれば、相当数の高校で A O 入試に向

いている生徒はどのような生徒か、ＡＯ入試に的確に対処するためには、高校での教育として何が重要か、などを見極めようと努力しているように思われる。

#### ４．おわりに

最後に、ＡＯ入試を５年間実施した結果、今後解決すべき課題についてまとめておく。

##### ・入試期間

長崎大学のＡＯ入試は出願期間から３グループに分けることができる。この５年間でグループを移動した学部もある。センター試験を課さない２グループは、出願から最終合格発表までほぼ２か月間で終了する。これに対してセンター試験を課す場合、この過程におおよそ３～５か月間かかっている。後者の場合、受験生にとってこの期間は必ずしも適切とは感じられないかもしれない。何らかの解決策が必要と思われる。

##### ・広報活動

大学入試全般についてわが国からの志願者数は今後も徐々に減少するだろう。入試で一定の競争的条件を満たすためには、ある程度の倍数の受験者数が必要である。このため受験希望者、高校ほかにＡＯ入試についてよりよく理解してもらうためには、ＡＯ入試に関した広報活動のなお一層の充実と強化が必要であろう。

##### ・学力担保

センター試験で学力を担保するという考えがある。しかしセンター試験そのものは近年易化の傾向を示している。そのためある要件の時には、有効な選抜には使えないこともあり得る。ＡＯ入試に際しセンター試験を課すにしても、資格試験的に扱う場合もあるだろう。広島大学のＡＯ入試（Ⅱ型）ではセンター試験を資格試験的に扱っている学部があるという（杉原 2005）。ひるがえってセンター試験を課さない場合、何で学力を担保するかがよく問われる。これは調査書の扱いとも関係し

ている。広い意味での学力は第２次選考で課せられる課題論文、面接面談、プレゼンテーション、簡単な実験などで判断できると思われる。募集単位が求める学生を確保できるように、これらの方法の一層の改善を図ることが重要であろう。

##### ・選考方法

５年間ＡＯ入試がなされてきたが、選考方法のマンネリ化を避けるためには、なお一層の工夫が必要である。ＡＯ入試については多くのパターンがあり、かつ試みられているが、他大学での試みなども参考になろう。今後ＡＯ入試が一般選抜後期日程などの代替手段として考えられる場合もあるだろう。そのような場合にはＡＯ入試の募集人員増が見込まれることから、（ＡＯ入試に際し）より客観的に評価できる方法を導入するための準備が必要である。ある１つの尺度から鑑みて客観的であると決めることのみに大きな意味はないが。多くの手間をかけても無駄な時間をかけないで、受験生の持つ総合的な能力をそれなりに合理的にはかる方法が、必ずあるはずだからである。

#### 注

- １）本研究の一部は、全国大学入学者選抜研究連絡協議会第１回大会（静岡）にて発表した（大作・南部 2006）。
- ２）人口動態統計の速報値によれば、わが国における2005年の出生数は前年比約５万人減の約１０９万人であった（毎日新聞 2006）。
- ３）平成１８年度入試では、ＡＯ入試の募集人員の本学全体の募集人員に占める割合は約５.５％である。

#### 文献

大久保貢・郡司達夫，2005，「福井大学ＡＯ入試入学者の学業成績・学生生活」『国立大学入学者選抜研究連絡協議会 第26回大

- 会研究発表予稿集』: 77-82.
- 大久保貢・郡司達夫, 2006, 「福井大学 A O 入試入学者の学業成績・学生生活」『大学入試研究ジャーナル』16: 71-76.
- 大作勝・佐藤博志・南部広孝, 2004, 「長崎大学における A O 入試の現状と課題」『大学入試研究ジャーナル』14: 175-183.
- 大作勝・南部広孝, 2005, 「わが国の国立大学の A O 入試から何がわかったか」『大学入試研究ジャーナル』15: 131-138.
- 大作勝・南部広孝, 2006, 「長崎大学の A O 入試 5 年間を総括する」『全国大学入学者選抜研究連絡協議会, 第 1 回大会研究発表予稿集』: 27-32.
- 大嶋知之・内村浩, 2005, 「A O 入試における選抜制度の変更と入学者の基礎学力との関係」『大学入試研究ジャーナル』15: 105-110.
- 白川友紀・島田康行・渡邊公夫・山根一秀, 2004, 「筑波大学 A C 入学者の追跡調査 - 平成 12 年度入学者の 3 年目と 14 年度入学者 - 」『大学入試研究ジャーナル』14: 65-71.
- 杉原敏彦, 2005/12/22, 「平成 17 年度第 2 回長崎大学アドミッションセンター研究会「A O 入試を考える(2)」資料」(長崎大学).
- 副島雄児, 2006/1/27, 「九州大学「21 世紀プログラム」」『第 3 回長崎大学大学教育機能開発センターシンポジウム資料』(長崎大学).
- 武谷峻一・岡田佳子・副島雄児・有馬學・柴田洋三郎, 2005, 「九州大学「21 世紀プログラム」の 4 年間」『国立大学入学者選抜研究連絡協議会 第 26 回大会研究発表予稿集』: 9-14.
- 武谷峻一・岡田佳子・副島雄児・有馬學・柴田洋三郎, 2006, 「九州大学「21 世紀プログラム」の 4 年間」『大学入試研究ジャーナル』16: 11-17.
- 毎日新聞(朝刊), 2006/2/22, 「05 年人口動態統計速報」.
- 文部科学省, 2006a, 「大学設置・学校法人審議会」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/daigaku/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/daigaku/index.htm)), 2006/09/20.
- 文部科学省, 2006b, 「平成 19 年度国公立大学入学者選抜の概要」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/08/06082405.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/08/06082405.htm)), 2006/8/29.
- 山岸みどり・加茂直樹・鈴木誠・池田文人, 2004, 「北海道大学 A O 入試 - 平成 13 年度 ~ 15 年度 - 」『大学入試研究ジャーナル』14: 57-62.
- 山岸みどり・加茂直樹・鈴木誠・池田文人, 2005, 「北海道大学 A O 入試の追跡調査」『国立大学入学者選抜研究連絡協議会, 第 26 回大会研究発表予稿集』: 15-19.
- 山岸みどり, 2006, 「北海道大学 A O 入試の追跡調査」『大学入試研究ジャーナル』16: 197-203.
- 渡辺哲司・武谷峻一, 2005, 「指導教員による九州大学 A O 選抜『一期生』の評価」『大学入試研究ジャーナル』15: 7-12.
- 渡辺哲司, 2006, 「国立大 A O 入試による入学者の特性」『大学教育学会誌』28: 110-116.